

菊池武光の墓

菊池武光（1319-1373）は菊池氏の 15 代当主であり、一族最大の戦功者であり、同氏が地方の武士団から九州で最も強力な政治勢力へと発展した影響力のある改革者である。

苦難の始まり

武光が 14 歳のとき、後醍醐天皇（1288-1339）の盟友であった父・12 代当主武時（1292-1333）が、博多（現在の福岡）で当時の日本を支配していた武家政権である鎌倉幕府の出先機関を襲撃して失敗し、戦死した。鎌倉幕府はわずか数ヵ月後に倒され、朝廷と武家支配の支持者が国の支配権をめぐる争う不安定な時代が始まった。

この権力闘争の結果、1336 年に朝廷は 2 つに分裂した。菊池氏は後醍醐に忠誠を誓い、南朝は武士が支持する北朝に対抗したが、北朝軍との数度の戦いで敗れた。武光の 2 人の兄が父の後を継いで菊池氏を率いたが、1 人は若くして亡くなり、もう 1 人は辞職を余儀なくされた。1344 年、武光が一族を率いる番になったとき、菊池氏は弱体化し、敵に囲まれていた状態にあった。

武光の台頭

武光は菊池氏を新しい時代に導こうとした。一族の中心地であった隈府（現在の菊池市中心部）を中心に行政改革を行い、菊池勢力の基盤を固めた。彼の政策には、隈府の 5 つの禅寺を特別の保護下に置く菊池五山制度が含まれる。その見返りとして、これらの寺院は様々な行政、監督、宗教的任務を遂行することで菊池氏に仕えた。

政治面では、武光は後醍醐天皇の皇子である懐良（かねなが）親王（「かねよし」とも；1329-1383）と手を組んだ。懐良親王は、南朝と地元の武士団との同盟を築くために九州に派遣されていた。朝廷の支援により、武光は一族の領土と影響力を拡大し、菊池氏の当主となってから約 15 年後には、九州各地の武士団からなる強力な連合軍を結成した。

征服と崩壊

1359 年、武光と懐良親王に率いられた約 4 万の武士が、現在の久留米市近郊にある筑後川の戦いで、約 6 万の北朝軍を破った。この決定的な勝利により、菊池同盟は九州全域を支配することになり、武光はおそらく九州で最も権力を持つ人物となった。

勝利後の数年間、菊池氏は陣地を固めようとしたが、南朝方から、勝利した九州の武士が（奈良

付近の) 吉野の天皇を訪問するよう要請があり、災いを招いた。武光が指揮する艦隊は九州から出航したが、北朝軍に迎撃され敗走した。また、北朝は九州の脅威に対処するため、新たな将軍として名高い戦略家、今川了俊(1326-1420)を派遣した。

了俊は 1372 年に菊池軍を博多周辺から追い出し、武光はさらに南で再編成するしかなかった。1373 年、菊池勢が以前勝利を収めた筑後川周辺の陣地を固めていたとき、武光は突然、状況不明のまま死去した。

最強の将軍を失った、懐良親王率いる南朝軍は九州の奥深くまで攻め込まれた。1383 年に懐良が死去するとその抵抗は終わりを告げ、菊池氏は再び祖先の土地である隈府周辺に閉じこめることになった。

武光の墓

菊池武光は当主となった後に創建した正観寺に葬られた。墓の上にそびえ立つ巨大なクスノキは、武光の葬儀の際に植えられたという伝説がある。現在の墓石は、1779 年に隈府の裕福な住民によって建てられたもので、中国神話の亀と蛇を組み合わせた動物の形をした特徴的な台座の上に立っている。この様式は 1700 年代に日本の高級武士の間で広まった。